

# 遊びの継続を図る保育者の援助

## — 5歳児の事例から —

椛島 香代\*・岩野 芽衣花\*\*

幼稚園5歳児学年の好きな遊びの保育記録を対象とし、3か月程度継続した遊びを4事例抽出した。その事例から保育者の遊びの継続を図る援助について質的分析を行い考察した。その結果、物的環境構成では遊びに必要なものを設定する、遊びの状況を観察しながら幼児のイメージを実現できるような物を提示するなど行っていた。また、保育者の援助としては物についての情報を提供する、知識、技能の獲得を図る、問題の明確化や問題解決に向けての支援、友達関係の仲立ちなどが行われていた。さらに、幼児の遊びの状態によって見守ることも行っていた。遊びの継続を図るために、保育者が遊びの中で幼児が見出す課題や困難さを理解し乗り越えるための援助を行っていることが明らかになった。

Key words：遊びに対する援助、遊びの継続、5歳児

### I はじめに

幼児教育においては、環境を通した教育を基本とし、遊びを通しての総合的な指導が謳われている（文部科学省、厚生労働省、内閣府・文部科学省・厚生労働省、2017）。「遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答しあうことに夢中になり時の経つのも忘れ、その関わり合いそのものを楽しむことにある」、「遊びを展開する過程においては、幼児は心身全体を働かせて活動するので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合い積み重ねられていく。つまり、幼児期には諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していくのである」とされている（文部科学省、2018）。幼児は、遊びを通して学んでいくのである。

遊びの中で経験が相互に関連することについて、

ビューラーの遊びの分類を使用した分析では虚構遊びのなかで構成遊びが多重構造で表れること（吉澤・杉原、2017）、ごっこ遊びの中で年齢が上がると互いの意図の調整のために費やされる時間が増加すること（福田、1994）などが報告されている。前者では一つの遊びの中に別の遊びの要素が含まれていることを示しており、後者では遊びが人間関係の育ちに寄与していることが示されている。また、ごっこ遊びの中で幼児は多様な基本動作を獲得しており、運動的な活動以外の場面でも遊びこむことで運動発達につながること（椛島・安達、2022）、様々な遊びの中で道具や素材とかわり微細運動の経験し技能を獲得していることも明らかにされている（椛島・安達、2023）。これらの先行研究から、遊びの中で幼児は多様な経験を積んでいることが示唆される。

保育現場では、保育者が意図をもって環境を構成し、遊びを援助している。保育者が遊びを通し

\* 人間学部児童発達学科

\*\* 文京学院大学ふじみ野幼稚園

での指導を行う場合、幼児の経験をとらえながら必要な経験、多様な経験ができるよう援助していく。幼児は主体的に遊びを選び活動しているのであるが、保育者の側では幼児の主体性を引き出し、必要な経験が可能となる活動（遊び）が生起するような状況を作り出しているのである。従って、保育者の環境構成によって幼児の遊びは異なってくる。保育者の意図と幼児の遊びとの関連を分析することで、遊びの中で幼児が適切な経験をするための援助の在り方を考察することができるだろう。さらに、保育者は幼児の遊びの継続を図るための援助を行うことも多い。遊びの継続は、幼児が遊びへの興味・関心を継続すること、遊びの中で新たな目当てを引き出すこと、遊びの中で試行錯誤したり問題解決を図ったりすること、課題や困難さを乗り越えることなど非認知能力の発達にも寄与すると考えられる。遊びを継続することで一つの遊びから多様な経験を得ることが可能となるだろう。また、一つの遊びが変化しつつ継続することによって、幼児が経験できる内容も変わることもつながる。保育者が遊びを理解し援助することが、幼児の遊びの中の経験の質に深い関係があるといえるだろう。本研究では、遊びの継続を図る保育者の援助に注目し、幼児の経験との関連で考察を行っていく。

## II 方法

期間：20XX年4月～7月

対象：埼玉県内私立幼稚園5歳児学年の一学級26名

資料収集方法：上記期間内のA保育者の保育記録をもとに、3か月程度継続した遊びを抽出し、分析対象事例とする。保育者の援助の意図が明確になるように意図の加筆を依頼した。

### 分析方法

・事例は質的分析を行う。事例に記述された内容を分析する。保育者の意図をアルファベット、援助を数字で整理していく。下線をつけ当該部分を明らかにする。意図については 波線、援助は 実線 とする。

・保育者の意図及び援助について分析し、遊びの継続のために必要な保育者の支援の在り方を考察する。

倫理的配慮：研究を実施するにあたり、幼稚園へ説明し承諾を得ている。事例分析に際しては、当該学級や幼児が特定できないように匿名化する。

## III 事例分析と考察

### 1. 事例の分析

3か月の分析対象期間内で2か月以上にわたって遊びが継続した事例が4事例採取された。A.昆虫採集、B.警察ごっこ、C.ボール遊び、D.ままごとである。これらの事例を保育者の意図、援助の観点で分類する。破線部分が保育者の意図、実線部分が保育者の援助である。

#### 事例A：昆虫採集（4月～7月）

(a) 昆虫に興味を持っている幼児が継続して採取したり、観察したりできるように①飼育箱や図鑑など定位置に設定しておいた、園庭にいるダンゴムシやアリを採集し、②保育者と共に図鑑を基に飼育環境を整えていった。中でも、(b)アリが巣を作っていく様子を観察できるように、③保育者は幼児たちと、アリの巣の周辺の砂と昆虫用ゼリーを入れた飼育箱に段ボールを被せて地中を思わせる暗さを作った飼育環境を用意した。

アリの巣が飼育箱の中で作られているかを毎日確認する幼児が複数名いた。その中で、餌があるにも関わらず、息絶えているアリを発見した。(c)疑問に感じていることを意識できるように④「なんで死んじゃったんだろうね。」と声をかけると、図鑑が置いてある場所へ行き、アリのことが書かれているページを見ていた。また、アリについて特集した本を見つけて読んでいると「住んでいる穴が異なるアリを一緒にすると攻撃をする」という情報が書かれていることを発見した。保育者は(d) 発見したことの情報を共有できるように、⑤「死んでしまったアリは違う穴から連れてきてしまったのかもしれないね。」と言葉にした。そこから、同じ穴に住んでいそうなアリを意識して採集し、周囲の友達に「同じ穴じゃないとダメだよ！」と伝

えている姿があった。

その後、発見した昆虫を図鑑で調べるという流れが定着していき、カマキリを採集した時には図鑑を見ながらカマキリの飼育環境を整えていた。

(e) 同じような興味の友達と目的を共有したかわりが生まれるようにと思い、⑥幼児の考えや行おうとしていることを周囲の幼児に伝えていった。互いの行おうとしていることを知ると、友達同士で図鑑を見ながら必要な物を伝え合い、共に必要な物を探したり手分けしたりしていた。長期間飼育することを目標にし、餌が絶えたと餌を採集していた。3日間休日がある時に、(f) 必要な食事を考えられるように、⑦幼児自身が1日に何回食事をしているかを問いかけた。すると、自身の食事回数が3食であることから、1食1匹と考えた。(g) 数を算出できるように⑧指で共に数えた。共に指の数を数えて、9匹採取することになった。しかし、9匹の採取は難しかった。採取できない状況に出会い、休日中に生きていられないと思い、虫を逃がすという考えに行きついた。

#### 事例B：警察ごっこ（5月～7月）

警察や救急隊に興味を持っている幼児が複数名いた。廊下や園庭を、見回りや交通整備というイメージで移動し、「オーライ!」「異常なし!」など声をかけ合っていた。拠点となる場所や具体的なイメージはない状態であったため、(h) イメージを具現化することや (i) 友達とのやり取りすることを楽しめるように⑨場を作る道具を用意した。戸外にて、(j) 交通整備のイメージが持てるように⑩ラインカーで「止まれ」と描いたり、⑪横断歩道に見立てたラダーの場所を相談して置いたりした。標識に興味を持っており、標識を描こうとしていたため、⑫標識のカードを見て描ける場を設定した。⑬パイロンとポールを組み合わせることで、それを応用して信号も作成していた。場を作ったり、製作したりする様子を見て、今まで警察や救急隊に興味を持っていなかった幼児が標識作りに参加した。標識作りの工程に、カードを見て描くことと、切ること、ポールに貼ることがあり、「私は貼るね!」「上手く描けない」「描けるかも、貸して!」と分担する

姿が見られた。

室内でも、戸外で交通整備を行っていたメンバーを中心に、ウレタン製の積み木や凸凹を組み合わせて枠を作る木製の積み木を用いて「警察署」として場を作り始めた。その場所で、取調室を作る幼児もいれば、「泥棒を捕まえる」と言っ出て入りする幼児もいた。その様子を見て何を行うか目的を見失い、佇む幼児や他の遊びに移る幼児がみられた。(k) 警察署としてのイメージが明確になるように、⑭パトカーを作成することを提案した。乗り物の図鑑を見ながら、それぞれが作りたいパトカーを段ボールで作成していった。段ボールで形を作ることの経験が少ないため、⑮車に見えるように形にするところを援助し、⑯図鑑を照らし合わせながら着色する箇所を相談して決めていった。⑰着色するためにはクレパスや絵の具があることを伝え、⑱広範囲を着色する時にはローラーを使用できるようにした。窓やドアを再現するために、穴を空けたり、開閉したりするように工夫していた。⑲室内にある素材を紹介すると、セロハンを貼ることでライトや窓ガラスが再現できることに気が付いて装飾していた。

他の幼児が製作している様子を見て、パトカーのみでなく消防車や救急車を作ることになった。先に作っていた幼児がローラーの使い方や絵の具の置き場所を後から作り始めた幼児に伝える姿があり、広範囲を着色する時は共に塗る様子があった。段ボールカッターで切る時に、段ボールがずれて切りにくい状況に出会った。(l) 物の扱い方を知ることができるように、⑳保育者がどこを支えようと切りやすいかを伝えながら後ろから手を持って共に支えた。周囲で様子を見ていた幼児がぐらついている箇所を持って手伝うようになった。

完成した後は、それぞれが段ボールの車に入ってパトロールのつもりで園内を回っていた。その中で、誰かが「火事です!」と発した声を聞いて消防車役の幼児が「ウー!」とサイレンの声真似をして、火事現場に見立てた場所に集まって消火する動きをすることもあった。

警察の遊びの場面だけでなく、生活の中でも警察のイメージを持続させていた。園庭を片付ける当番を行う際に、(m) 当番への意欲に繋がるよ

うに、㉑「警察の方、こちらにまだ落とし物があります。」など、当番中に警察のイメージで声をかけていった。当番に慣れてきた頃、(n)自分達で進めていけるように、㉒保育者が進行をせずに様子を見守っていた。すると、警察のイメージを持っている複数の幼児が、当番の友達が集まっている前に立って、敬礼をして「片付け当番を始めます！」と開始の合図をしていた。また、警察のイメージの友達同士で「こっちはオッケー！」「見回りに行くぞ！」と声をかけ合って片付けを行っていた。

#### 事例C：ボール遊び（4月～6月）

4月に学級替えがあり、(o)幼児がルールを共有して進める遊びの一つになるように、㉓学級活動でドッジボールを行った。㉔保育者がドッジボールコートにいて「入れて！」と参加し、行っている様子を見てさらに参加するようになった。保育者が㉕チーム分けの方法を手伝ったり、㉖審判の役割をしたりして進める方法を伝えていった。

身体を動かすことに自信を持っている幼児が積極的に参加していた。その様子を見ていたり、ドッジボールコートから離れたところでボールを投げたりしている幼児がいた。参加したいが、自信がないと判断し、(p)幼児がドッジボールに参加する意欲もてるように、㉗保育者と共にキャッチボールをすることに誘った。㉘投げ方や取り方のコツを伝え、㉙できていることを認めていくと、笑顔が増えて何度もキャッチボールを繰り返した。ドッジボールコートで他の幼児達がドッジボールを行っており、㉚キャッチボールをしていた幼児に「ドッジボールやろうか」と声をかけると、「入れて」と自らドッジボールの集団に声をかけて参加した。(q)友達とルールのある遊びを行う楽しさを感じられるように、㉛参加したばかりの幼児がボールを取った時や当てた時に共に喜び、㉜当てられた時には励ましていった。

6月になると、興味を持って参加していた幼児が友達を誘ってドッジボールのコートに集まるようになった。人数が同数になるように、中央の線を使って数えながら移動して決めていた。ほぼ同

数になると開始し、勝敗が出るとメンバーを入れ替えて再度開始することを繰り返していた。

何度か勝負をした後に、「投げる練習しよう！」と二人一組になって投げ合うようにしたり、「今度はサッカーにしよう！」と枠に使っていたパイロンとバーの位置を変えてゴールに見立ててサッカーを開始したりしていた。パイロンなどの位置を自在に変えられることに気が付き、対面に設置するだけでなく、ドッジボールのサイドのライン上に平行に置き、その対角にもう一組を置いて動きを変化させることを楽しんでた。(r)ルールを変化させながら友達と共に共有して遊びを進めていく面白さを感じられるように、㉝やり取りを見守った。

#### 事例D：ままごと（4月～6月）

(s)様々なイメージでままごとを展開できるように、㉞折りたためる軽いマットや牛乳パックで作った積み木、フライパンや食器、フェルトで作られた食材、風呂敷やバンダナなどの布類、テーブルなどを保育室に設置していた。

4月には、一人で黙々と料理を盛り付けしたり、二人や三人でアニメのキャラクターでやり取りしたりする場になっていた。その場所に長時間は滞在せず、休憩をするような場になっていた。㉟隣の部屋にウレタン製の積み木や凸凹を組み合わせて枠を作る木製の積み木が設定されており、そこで旧学級の友達と会ってお城や基地などのイメージで場が作られていた。

5月になり、保育室のままごとの場で、興味の合う友達と家のように設定するようになった。マットを立てて壁を作ったり、床に敷いてベッドに見立てたり、マットが青いことでお風呂に見立てたりしていた。布をまとめて洋服にしたり、敷いて布団にしたり、皿を磨いたり、風呂の湯に見立てたりするようになった。(t)自分たちで工夫したことに自信を持てるように㊱「なるほど、こうやって使うのね」と声をかけていった。遊んでいる様子を見て、「入れて」と参加する幼児が増えていった。同じ場にいるがやり取りが少なく、個々で好きなように動いており、自然と解散していた。(u)それぞれのイメージが伝わるように、㊲保育



者がままごとに参加し、役になりながらやり取りを繋いでいった。

6月には、ままごとで遊び始める幼児のグループが定着しつつあったが、今までままごとに参加していなかった友達も参加するようになった。その中で「お父さんいないから、お父さん役やって」「ネコがいい」など役割を決めるやり取りが生まれていった。ままごとの中でも「いってきまーす」「これこっちに置こう」と展開に合わせて言葉を発したり相談したりするようになった。動きながら言葉を発しており、発した言葉に対して応答したため、(v) 友達同士で世界観を作っていくことを楽しめるように 見守っていた。人数とやり取りが増えたことで、場の設定に変化が生まれた。人が入るように場を広くするために教材の入っているワゴンを動かしたり、机を2台合わせて食卓を広くしたりしていた。トイレや基地など場の設定も増え、マットを二枚組み合わせて箱の形になるようにしたり、斜めにして滑るようにしたりと新たな発想を楽しむようになった。

## 2. 保育者の意図及び援助について

### (1) 保育者の意図

事例全体で保育者の意図が記述された箇所は全部で22か所あった。意図の説明の後には必ず援助が記述されており、保育者が日頃から意図をもって幼児の遊びにかかわっていることがわかる。詳細を見ていくと、保育者は様々な意図をもち保育実践を行っている。内容で分類したところ、表1のようにまとめられた。

表1. 保育者の意図

種類	下線記号
動機づけ	(a), (b), (m), (p)
主体性発揮	(n), (t)
課題の明確化	(c), (f)
イメージの具体化	(h), (j), (k), (s)
課題解決	(g)
情報共有	(d)
友だち関係構築	(e), (i), (u), (v)
教材の理解	(l), (o), (q)
創意・工夫	(r)

まず、遊びに対して興味・関心を引き出す、意欲を継続するための動機づけがみられた。

その他には主体性の発揮、課題の明確化、問題解決、情報共有、友達関係の構築、教材の理解、創意・工夫があり、保育者が多様な意図を持ちながら援助していることがわかる。遊びの継続には、楽しさを継続するだけでなく、遊びの中で出てくる様々なハードルを乗り越える必要がある。事例Aでは、昆虫を死なせないためにどのようにすればよいかを考える必要があったし、事例Bでは、遊びのイメージが幼児の間で共有できず遊びに入りきれない幼児がいたり、自分のイメージを具体化するための技能が不足したりしていた。また、事例Cではボールを操作する際の技能に個人差がある、事例Dでは幼児がお互いのイメージをうまく伝え合うことができずにいる様子があった。援助についての記述の前に意図が述べられていることから、保育者はこれらの遊びの中で出てきた問題を理解し、解決する意図を明確に持っている。保育者は遊びの状態を理解しながら、遊びや幼児に今、何が必要なのかを考えているといえるだろう。

遊びそのものに対してだけでなく、学級全体の経験に対して意図を持つこともあるとわかる記述が見出された。事例Cにある下線o及び下線qは、集団遊びを幼児に提示し共に楽しめるように意図していた。幼児教育では集団ならではの経験も大切にされている(文部科学省, 2018)。保育者が学級全体に働きかけることも環境構成の一つである。下線oでは、学級全体で経験したことが推測できる記述となっている。保育形態も環境構成の一つとして、保育者が意図をもって学級活動を設定していることがよみとれる。

遊びの経験を生活場面でも取り入れ、幼児が主体的に生活できるよう意図している事例もある(事例B 下線m, 下線n)。保育者が幼児の生活の連続性を理解し、幼児の主体性を引き出すためにその時点の遊びを活用しつつ生活に向かう力を育てている。幼児期は自己中心性を持つ時期であることが知られており、集団の中の自分を認識しつつみんなのために行動する、他の人の役に立つということを自覚することが難しい場合がある。活動そのものの楽しさを感じつつ結果的に周りの幼児

に認められ、うれしい気持ちをもつことで当番に対する意欲を育てることになるのだろう。保育者が幼児期の特徴をよく理解した上で遊びと生活場面を分断することなく捉えていることがわかる。

以上から、保育者はかかわっている遊びそのものに対して意図を持つだけでなく、集団全体の育ちや幼児の生活の連続性に対しても意図を持ちつつ遊びにかかわっていることがわかった。好きな遊びの場面は、園内のあちこちで様々な遊びが同時進行しているが、保育者は学級の幼児の遊

びの状況や遊び同士の関連性、個々の幼児の育ちだけではなく学級全体の育ちなどミクロとマクロの視野を持ちながら幼児や遊びを理解し、援助の方向性を探る必要があるといえる。

## (2) 保育者の援助

保育者の援助については、全部で38の記述が抽出された。援助の内容を分類したところ、表2のようにまとめることができた。

表2. 保育者の援助

	援助の内容	下線番号
物的援助	遊びに必要なもの の設定	①⑨⑫⑬⑳⑳
	イメージを実現するもの の設定	⑩⑪
人的援助	遊びの提供	⑳
	存在する	㉑
	受容・承認	㉒⑳⑳㉔
	仲間として共に活動	㉕㉖
	問題提起	㉗㉘
	課題解決	㉙㉚㉛㉜
	イメージの実現	㉝㉞㉟
	友だちとの仲立ち	㊱㊲
	動機づけ	㊳
	活動の提供	㊴
	活動の発展	㊵㊶
	素材の紹介	㊷㊸
	理解・技能の獲得	㊹㊺㊻㊼
	見守り	㊽㊾㊿

物的環境への援助、幼児に直接かかわる人的環境としての保育者の援助に大きく分類できた。物的環境への援助では、遊び進めるために必要な物を出したり、幼児が遊びの中で具体的にイメージできたりするような物を出して設定している。多種多様な物を出すとともに下線⑩では、身近なものを見立てて遊びに活用している。保育者自身が園環境に習熟し、遊びに必要な物を提供している。事例Aでは昆虫の飼育環境を用意すること(①②)、昆虫についての知識や理解を深められる書籍類を設定すること(①)、事例Bでは交通整備というイメージを実現するために関連する物を設定すること(⑩⑪⑫⑬)、幼児がイメージした車両を製作す

るための材料を提供すること(⑰⑱)などを行っている。物があることによって幼児は遊びのアイデアやイメージがわいてきたり、したいことを実現したりして遊びが続いている様子がわかる。

保育者は前述のように明確な意図を持ちながら援助している。幼児に働きかける援助を人的援助とした。物的環境と関連あることでも幼児に働きかけている。幼児が物に気づくための情報提供を行っているのである(⑰⑱)。事例Bでは設定されている物を保育者から知らされたことで、幼児はライトや窓ガラスにセロハンを使うという新たなアイデアをもって車両づくりに取り組んでいる。保育者は幼児にとって安心できる存在として、

また気持ちを支える存在としても重要である（存在する、受容・承認）。事例Cでは、ボール操作に自信がもてない幼児は保育者が遊びに参加していることで安心して仲間入りできたり（30）、ほめられたり（31）うまくできない時に保育者から励ましてもらったりしている（32）。一方で、技能の習熟には反復することも必要であり、うまくできない時に乗り越えるための援助が必要である（28）。一緒にキャッチボールをしながらも（27）ドッジボールに参加できるよう誘うことも行っている（30）。また、事例Bでは遊びのイメージを共有できずにいた幼児に新たなかかわり方を提供している（14）。さらに、素材の扱いや道具の使い方についての指導を行っている（15、18、20）。幼児が難しさを感じている、技能が未熟であるなどと判断できる場合には、やり方を伝え課題を乗り越えられるよう細やかにかかわっている。

友達関係を育てる援助もある。事例Dでは、遊びに参加しながらやり取りをつなぐなど友達のかかわりが育つ援助も行っている（37）。さらに、事例Aでは、疑問や解決すべき課題を理解しやすくまた友達同士で共有できるよう発言し（4、7、8）幼児が自ら解決に向かうことができるよう導いている。幼児期も人間関係の発達を促すことは重要な目標であるが、かかわり方だけでなく共に考え協同しながら遊びを展開できるよう、仲立ちの質も異なることがわかる。

事例B、C、Dいずれでも幼児が自ら遊びを進めることができると、保育者は幼児の様子を見守っている（22、33、38）。意図の記述から、幼児の主体性を尊重していることがわかる。遊びの中で幼児が何を体験しているのかを見極めながら、自分たちで遊びを進めていけるよう援助している。幼児の立場に立った保育が展開されているといえる（文部科学省、2018）。

このように、保育者は幼児が自ら環境にかかわり遊びを展開できることをめざして様々な援助を行っている。遊びが継続するためには物的環境を整え、心理的支えになること、友達関係を育てること、必要な知識・技能を獲得できるよう支援することなどを行っていることが明らかになった。

#### IV おわりに

保育者が物的環境や援助を行うことで、幼児は遊びに対する意欲を継続しつつ知識、理解、技能を獲得する、友達とのかかわりを深める、困難や苦手だと感じることを乗り越える、遊びのイメージを実現するなど多様な経験を重ねている。特に、遊びに対する意欲を継続することは、知識や技能の獲得、新たな課題を自ら見出す問題発見力、考え続ける力、問題解決に向けて試行錯誤する力などを身につけることにもつながるであろう。保育者は、幼児が自ら学ぶ力を獲得できるよう幼児の実態を把握しながら援助の在り方を吟味していく必要がある。一方で、幼児が自らの力で遊びを進めているときの保育者の態度は重要ではないか。遊びの観察を怠らず、ねらいを達成するための経験ができていのかを考察し援助すべき点を探究している必要がある。「見守る」とは、幼児の育ちを適確に捉える保育者の観察力により、選択的に行われる行為なのである。幼児の主体的な活動としての遊びを援助することこそ保育者の専門性が問われることであり、保育者が遊びをどのように理解し、どのような意図をもって援助を行うのか今後も様々な観点から明らかにしていきたい。

#### 引用文献

- 福田きよみ（1994）. ごっこ遊びによる他者理解促進効果についての研究, 科学研究費助成事業報告書（研究課題/領域番号06780018）
- 梶島香代・安達祐亮（2022）. 幼児のごっこ遊びに表れる基本動作, 文京学院大学人間学部研究紀要23, 1-10
- 梶島香代・安達祐亮（2023）. 4歳児の微細運動を育む保育者の援助—好きな遊び場面の分析から—, 文京学院大学人間学部研究紀要24, 1-10
- 厚生労働省（2017）. 保育所保育指針, フレーベル館
- 文部科学省（2017）. 幼稚園教育要領, フレーベル館
- 文部科学省（2018）. 幼稚園教育要領解説, フレーベル館
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017）. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領, フレーベル館
- 大瀧ミドリ・田村綾子（2003）. 保育園児のままご

遊びの継続を図る保育者の援助（柗島香代・岩野芽衣花）

と遊びの継続時間と既得知識における経時的变化,  
上越教育大学研究紀要23（1）, 275-286

吉澤千夏・杉原ちあき（2017）. 幼稚園年中児の遊び  
の継続と変化：園児Aの1週間の遊びの観察から,  
上越教育大学研究紀要37（1）, 229-238

（2023.9.27受稿, 2023.10.19受理）